奈良・平城宮跡（第二二次北）

1 所在地　奈良市佐紀町
2 調査期間　一九六四年（昭39）一一月～一九六五年五月
3 発掘機関　奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部
4 調査担当者　榧本亀治郎
5 遺跡の種類　宮殿・官衙遺跡
6 遺跡の年代　奈良時代～平安時代初期
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

平城宮跡第二二次北の調査は、第二一次調査（前項参照）に東接する地域で、三一〇〇m²にわたって行った。検出した主要な遺構は井戸二基と掘立柱建物、柵及び溝とである。この地域は関野貞『平城京及大内裏考』以来左京一坊大路が存在したものと推定されていたが、調査の結果は一坊大路推定地にも官衙跡が検出され平城宮が東へ拡張していることが明らかとなった。検出された遺構は井戸二基、掘立柱建物五棟、柵三列、溝五条である。このうち木簡が出土したのは井戸SE三〇四六とそこから流れでる玉石組の溝SD三〇四七とそれが流れ込む南北溝SD三〇五〇、さらにSD三〇五〇の西四mのところを流れる南北溝SD三〇三五である。

SE三〇四六溝　井戸SE三〇四六は発掘区のほぼ中央で検出され、東西五・一五m、南北三mの長方形で木製の井戸わくをもち、掘立柱の覆屋をともなっている。湧水は南西隅にとりつけた暗渠の木樋であふれ出、玉石組の溝SD三〇四七につながっている。木簡は井戸の堆積土中から曲物、箸、箆、人形とともに二点出土し、また井戸底のバラス中より一点出土した。釈読可能なのは堆積土中から出土した一点のみである。

SD三〇四七溝　SE三〇四六の排水溝SD三〇四七は木樋の暗渠から先ず玉石溝の開渠になり、さらに側板をほどこした溝となって南西にのび、西井戸SE三〇四九の排水溝SD三〇五〇に合流する。木簡は玉石溝の堆積土上層から曲物や箸とともに木簡一点が出土したが、釈読できなかった。

SD三〇五〇溝　SD三〇五〇は、東西柵三〇二三附近で溝幅をひろげ、深さ三〇cmほどで幅は約八〇cmとなる。溝の堆積層は上下の二時期にわかれる。木簡は上下両層から計一六点出土した。上層からは、「酒司／造酒」と記した墨書土器とともに木簡一四点が出土した。下層からは曲物、箸、板などとともに木簡二点が出土している。上層からは宝亀元年銘の木簡が出土しているので、この溝は宝亀元年にもなお使用されていたことがわかる。

SD三〇三五溝　深さ約二〇cm、溝幅約七〇cmであるが、発掘区の南端では、たまり状に広がったと思われ、幅は約四・五mになっている。またこの溝に沿った東側には芝垣状のものが南北に続いて

いる。溝の堆積土は四層にわかれ、木簡は堆積土全体から計五六二点出土している。とくに第三層と第四層とが多く、最下層である第四層からは、この発掘区で最古の年紀である霊亀の紀年銘をもつものが三点出土している。また最上層からは天平勝宝八歳の木簡が出土している。この溝では木簡とともに曲物、箸、檜扇、人形、騎馬像のレリーフのある厚板が出土しており、墨書土器には「酒」「酢」などと記したものがある。

8　木簡の釈文・内容

SE三〇四六

(1)・×□子〔曾カ〕□人〔仕カ〕二人□八升

・×□　(62)×(8)×7　081　二五四九号

SD三〇五〇

(2)・「〈能登國能登郡□□郷□□里□□〉」

・「〈　天平四年四月十七日〉」　228×(18)×7　031　二五三七号

(3)「〈駿河國安倍郡貢上甘子□□□〔御カ〕□　寶龜元年十＝

＝二月〉」　222×8×4　031　二五三八号

(4)「〈釘大小并二百□×　(146)×29×4　039　二五三九号

SD三〇三五

(5)・符造酒〔司カ〕□×　091　二三九三号

(6)「　若湯坐少鎌

・造酒司符　長等犬甘名事

日置藥

・「直者言從給狀知必番日向□〔参カ〕」　(150)×38×3　011　二二三四号

(7)・「監物史生等謹啓　酒一二合」

・「右依望處分　□以狀　」　177×34×4　011　二二三五号

(8)・「〈十一月十六日水汲針杲安高宮五百嶋

田部咋未呂長□足嶋〔車カ〕」

・「〈　民酒人　丈部□足未呂〔奈カ〕〔ママ〕

桑原知嶋　日置造金□〔ママ〕」　256×26×4　033　二二三七号

(9)・「親王八升　三位四人一斗一升」

・「伎人六升　」　102×16×6　011　二二四〇号

(10)・×酒五升已上大殿祭料」

・×『二升』　」　(120)×10×3　061　二二四一号

(11)・「尾張國中嶋郡石作郷」

・「酒米五斗九月廿七日」　140×17×3　011　二二五一号

(12)「〈両村郷御酒米五斗〉」　178×23×5　031　二二五二号

(13)「〈山田郡建侶酒部枚夫赤米〉」(169)×20×5　031　二二五三号

(14)・「〈氷上郡井原郷上里赤搗米五斗」
・「〈上五戸語部身　」　190×30×5　032　二二五五号

(15)・「播磨國赤穂郡大原□」
・「五保秦酒虫赤米五斗」　151×27×3　033　二二六一号

(16)・「美作國勝田郡豐國×」
・「　舂米六斗　」　(120)20×3　081　二二六二号

(17)・「〈備後國御調郡　」
・「〈諫山里白米五斗」　146×22×6　033　二二六三号

(18)「〈八弁郷舂御酒米五斗〉」　195×22×6　031　二二六四号

(19)「〈備前國海細螺　御贄一斗」　180×24×6　032　二二八二号

(20)「青郷御贄伊和志腊五升」　75×14×3　021　二二八三号

(21)「〈紀伊國无漏郡進上御贄礒鯛八升〉」　183×27×4　031　二二八五号

(22)「〈筑後國生葉郡煮塩年魚肆斗貳升霊亀三年〉」　172×21×4　031　二二八七号

(23)「〈清酒中」　154×(22)×4　032　二二三一九号

(24)「〈清酒四斗」　146×16×5　032　二二三一八号

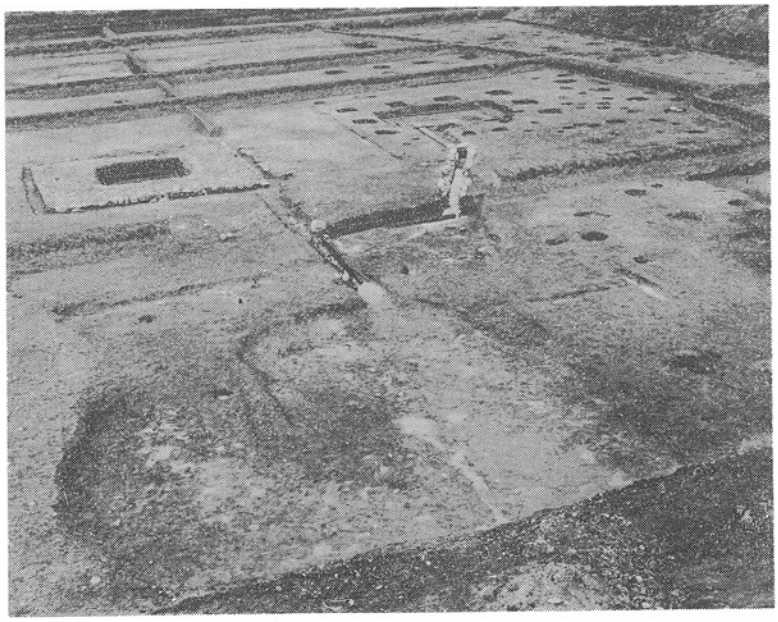
(25)・「檜若立卅二□　□□葉二荷
□□〔荷カ〕
・「　□□□□□
□□□□　眞前葛十荷葉着　袁等賣草二荷　285×(13)×3　081　二二四三号

(26)・「袖女『一』」
「麻　」　71×19×2　021　二三四一号

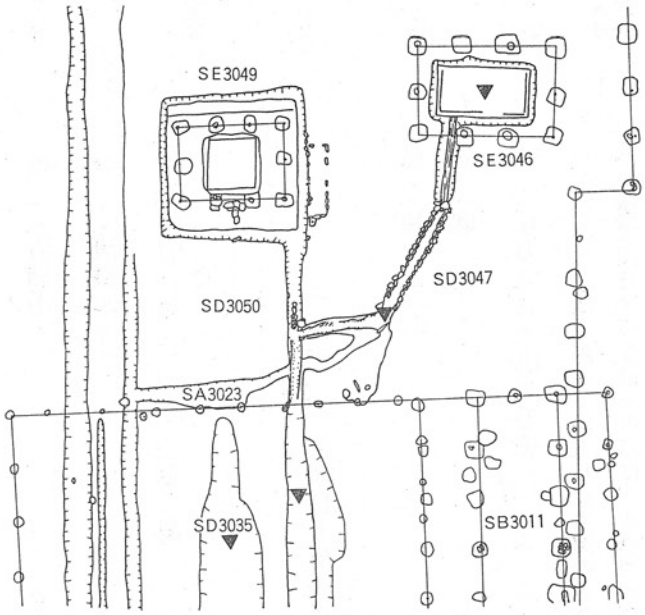
(27)「正月八日大臣家毛蓆一□〔合カ〕〈」　120×25×5　032　二三三七号

以上が第二二次北調査で出土した木簡の主なものであるが、これらの木簡で注目すべき第一の点は、造酒司及び酒米、酒等の記載が顕著であることである。このことはまた墨書土器に「酒司」「造酒」「酒」等がみえることとも関連するが、これらの点からみてこの地域で検出した井戸や建物群は造酒司ないしそれに関係する施設ではないかと考えられている。つぎに注目されることは、これらの木簡の中には、聖武天皇即位に際しての大嘗祭に関する木簡が多数ふくまれていることである。とくに(25)は大嘗祭の時の造酒司の供神物料である檜、真前葛などを書きあげたもので、大嘗祭に関するものを

直接示す史料である。また神亀元年銘をもつ木簡がSD三〇三五溝で、㉕と同じく第三層から出土したもので、このことが大嘗祭が神亀元年、すなわち聖武即位に関するものであることを示していると判断される。



第22次北調査検出井戸及び溝



第22次北調査木簡出土地点図

9 関係文献

田中　琢　「昭和39年度平城宮調査出土の木簡」（『奈良国立文化財研究所年報』）　一九六五年

横山浩一　「昭和39年度平城宮跡発掘調査概要」（同右）

工楽善通（奈良国立文化財研究所）　『平城宮跡昭和39年発掘概報』　一九六五年

同　『平城宮跡出土木簡概報㈢』　一九六五年

同　『平城宮木簡二』一九七四・五年　（鬼頭清明）